

「お知らせ」
 すでに先の例会時にお知らせしましたが、本年度の根戸小学校会場の使用については、申請通り午前・午後とも使用の許可を得ましたのでお知らせいたします。
 また、本年度の活動方針につきまして、後日ご連絡いたしますのでご期待頂くと共に、皆様の更なるご協力をよろしくお願ひ申し上げます。
 編集部

「オーディオと私」

中学生の頃

中学を卒業する頃、音楽の教師が全員に将来の生活と音楽について何か書くようにと云ったことを、拙文を会報に載せる羽目になって思い出した。その時「オールホーンのシステムでワグナーの「リング」を聞いていたい。」と生意気なことを書いた。そのころ、私はビクターのレコードプレーヤー(ターンオーバー式圧電カートリッジ)にスプリングで針圧をかけるパーフェクトビックアップと称するものが付いていた。(を2台のラジオに繋いで30数枚のクラシックのLPを繰り返し聞いていた。ラジオの片方はナショナルのFM付き3バンド、もう一方はノンプレスコーン付きオンキョー製であった。中学生のわりにLPを持っていたのは、当時の都立高校入試が9科目900点満点制で数学、英語、音楽も同じ配点だったため、合格する為にはクラシックを聴くことが絶対必要と親を丸め込み、小遣いとは別枠で買ってもらっていたからだ。)

デパートのパーゲンセルで漁った一枚千円のジャケット隅に穴の空いた絶版レコードが大抵だった。リングはシヨルティの「ラインの黄金」ハイライト盤のみだった。
 自宅から徒歩5分以内に、愛宕山NHK放送博物館、虎ノ門霞山会館のビクターショールーム、外神田へ移る前のYL音響試聴室などがあつた。NHKではレコードコンサートで2S 305、ビクターでは生演奏すり替え実験につかつたホーンズピーカーなどを聴いていたが、とりわけ印象にのこつたのがYLの「マエストロ」という当時開発中だったオールホーンのシス

テムの音だった。
 高校入学祝いとして最初のオーディオセットを手に入れた。プレーヤーはNEATのターンテーブルにグレースのアーム、テクニカのカートリッジ。アンプはトリオのW 41、チューナーは同じくFX 2。スピーカーはパイオニアのPAX 20Aを市販のバスレフ箱に収めた。入試のためという大義名分が使えなくなったため、FM放送と日比谷図書館で借りるLPがソフットの中心になった。更に逆風が強まり、家族に煩がれスタックスのヘッドホンで聴くことが多くなつた。しかし、頭の中では「マエストロ」が鳴っていた。
 大学に進んでから、恩師がスタックスのコンデンサースピーカーを持っていて、何度かお宅にお邪魔するうちに次第に惹かれるようになり、コンデンサーの繊細さとホーンの迫力を両立できないかと考えるようになった。社会に出るからは、さすがの世間知らずもオールホーンシステムなんぞはしがない安サラーマンには所詮高嶺の花だと思ひ知つた。丁度そのころだった。オーディオフェアでハイルドライバーなるものを聴いたのは...

ハイルドライバー

TEACが輸入したESSのamtlとプロ用モニターのエストレークをデモっていた。私の耳には価格で十分の一以下のamtlの方がほとんどの点で勝つて聞こえた。特にハイルドライバーが受け持つ中高音域では圧倒的だった。ウエストレークもJBLのドライバを搭載していたが鮮度がちがつた。
 これを使えば巨大な磁石を背負つた高価なYLやGOTOのユニットを使わなくても高品位なスピーカーシステムを作れると夢想した。その後、何回かのボーナスを注ぎ込んで完成させたシステムは一部パーツの入れ替えはあるものの三十五年後の現在でも使つてゐる。日立方式のスーパーウーファー+4ウェイ、アンプは片チャンネル5台を要する馬鹿馬鹿しいものではあつたけれど音質には自信があつた。事実、私のシステムを聴いて、amtlを購入した者が5人もいた。

スピーカーコレクター

彼らとは年賀状で、お宅のハイルドライバーの調子は如何ですか?というのが決まり文句だった時期もあつた。
 考えてみると、自作スピーカーに強い情熱を

持てたのはこの時期までだつたと思へる。家庭を持ち、勤めもありとなると自作スピーカーで音楽を聴くのは時として苦痛になることもある。音質について気になると弄りたくなる。
 ユニットの相互位置関係とかマルチアンプだから可変要素はいくらでもあるし、追い込めば確かに良くなる。それで調整が深夜に及ぶことにもなる。それでは音楽に浸れないし、仕事に響くし、家庭不和も招きかねない。
 次第に市販スピーカーで聴くことの方が多くなつてきた。勿論、音質に不満はある。しかし、他人が作った商品と割り切れるし、音質について耳が慣れれば(頭の中で補正すれば)音楽に浸れる。ということできつつかスピーカー博愛主義に目覚めた。

一旦そうなつてみるとスピーカーというのは実に興味深いものだ。誰かがゴミも集めれば歴史を語り始めると言つていたけれど、一つのスピーカーをオーディオ史の中に位置づけ、その成り立ちと音質をキチンと評価するという事に私なりに意義を見いだした。オーディオがブームであつた頃、各メーカーがスピーカーの開発に注いだエネルギーは大変なものだつたと思う。あんな時代は二度と来ないだろう。だからこそゴミとして朽ちてゆくのを見るのは忍びがたい。勿論、懐に限りがある以上、定価で購入する事は滅多にならぬ。貰い受けたり、リサイクルショップで格安で手に入れたり、捨ててあるのを拾つたりで、気づいてみればかなりの数になつていた。この状態はある意味、捨て犬や猫をたくさん飼つて周囲から迷惑がられる人に近いのかもしれない。しかし辞められない。辞められないけれど、可愛がつてくれて、キチンと餌(音声電流)与えてくれる方がいらつしやたら、喜んでお譲りしたいと考えている。

リスニングルーム

別にスピーカーを集めすぎたわけではなかつたが、十年前、家を新築することになり、これが最後のチャンスと思ひ、間口4M、奥行7.5M強、高さ3.1Mのスペースを確保した。加えて間口4M、奥行1.3M、高さ0.6Mのロフトを天井に沿つて設け、フロントロードの低音ホーンと中低音ホーン、250リットルのバスレフボックスを左右2組収め、永年の宿願であつた4Wayオール

ホーンシステムを導入することができた。
 当初、全くバラバラな音でどうしようもない状態だったが、アキユフェーズのデジタルチャンネルバイバイバイDF 35で音源位置を揃えることができるようになって何とかがまとまつてきた。しかし、ハイルドライバー系のシステムの水準には今のところ及ばない。
 6年前にAAFCに入会した。そこで多くの知ひを得たことは、オーディオは孤独な趣味と諦めていた私にとつて望外の喜びであつた。また近年、結婚以前のように生演奏に接することも増え、今年になつてからは新国立劇場でオペラを3本見る機会を得、なかでも三月には、「ラインの黄金」を初めて観劇することができた。
 思えばあの中学三年の作文からは四十五年経つていた。

また、昨年暮れに「プロミス オブ ミュージック」という映像作品を見た際、深く感じ入るところがあつた。
 私はヴェネズエラの青少年のように演奏する側には回らなかつたけれど、また回らなくて正解だつたとは思つたけれど、これまで音楽の力によつて支えられてきた部分が大きいと今思ひ返している。エル・システムスの提唱者アブレウ博士の云つたところの「音楽へのアクセス権」を享受できる幸せを噛みしめている。
 清水 俊一

自作システムの概要

	ハイルドライバー系	ホーン系	アンプ
	1974年~	現状	2001年~
高域	パイオニア製 PT-R7	PT-R7III	フォステクス製 T-925A
5KHz~	ES5製	TAD製 D-2001	テクニクス SE-A1010
中高域	パイオニア製	フォステクス製 H-320	
1~5KHz	日立製 L-200	パイオニア製 SS-G8のミッドバス	山水 S-2102Mos
中低域	日立製 L-200	パイオニア製 S-1000TwinAのウーファー	
200~1KHz	平面パワフル	自作ホーン	
低域	フォステクス製 SLE-20W 4発	TAD製 TL-1801b	山水 S-2102Mos
50~200Hz	(マジックアワー) 200閉鎖前	ラフクワフト製ホーン FL-38	
超低域	パイオニア製 PW-A25	フォステクス製 FW-405	DENON POA-2200
~50Hz	日立方式ASW	250リットルバスレフボックス	
分割周波数は概略	パイオニア製 D-23	チャンネルバイバイアー	アキユフェーズ製 DF-35
			NHT X-1

(紙面の都合により写真は割愛させて頂きました)